

モビリティーズ研究におけるオートエスノグラフィー

——「実証」の再定義をめぐって——

ICU 社会科学研究所 根岸海馬

1 目的

現代社会でヒトやモノはかつてないほどの距離をかつてないほどの速度や頻度で移動している (Sheller & Urry 2006)。モビリティーズ研究は、このように「動的 (モバイル)」な現代社会を捉えるためには定住社会を自明のものとしてきた既存の理論・方法論・方法の枠組みを再検討する必要があると指摘する。本報告はモビリティーズ研究が提起する方法論および方法の側面に焦点を絞り、近年新たな潮流を形成しつつあるオートエスノグラフィーを採用した研究を考察することで、モビリティーズ研究において「実証」という概念がどのように再定義されているのかを検討する。

2 方法

モビリティーズ研究は、動的な現代社会を考察するためには伝統的な方法論によって定義される「実証」および方法には限界があり、新たな方法論・方法の検討が必要であるとする (Sheller & Urry 2006)。本報告では、まず、モビリティーズ研究がどのような方法を採用して従来の研究で自明視されてきた「移動する身体」に光を当てようとしているのかを検討する。次に、これらの研究を貫く方法論である「ニュー・エンピリシズム (new empiricism)」(Clough 2009) について考察する。この考察を踏まえて最後に、モビリティーズ研究の方法として近年多用されるようになった「オートエスノグラフィー」(Ellis 2011 et al.) に焦点を絞り、この方法の可能性について考える。

3 結果・結論

本報告は、「実証」概念の再定義をモビリティーズ研究の重要なアジェンダとして位置づけると同時に、動的な現代社会を把握しようとする際に「ニュー・エンピリシズム」のアプローチが非常に有効であると論じる。また、このアプローチを具現化する方法であるオートエスノグラフィーは、従来の説明的で客観的な記述では見落とされがちだったミクロな現象を調査者による反省的叙述をとおして捉えようとする。この方法は、モビリティーズ研究を更に発展・深化させる契機をもたらすとともに、モビリティーズ研究の新たな方向性を指し示すものである。

文献

- Clough, P. T. (2009) The new empiricism: Affect and sociological method. *European Journal of Social Theory* 12(1): 43-61.
- Ellis, C., Adams, T. E. & Bochner A. P. (2011) Autoethnography: An overview. *Forum Qualitative Sozialforschung* 12(1).
- Sheller, M. & Urry, J. (2006) The new mobilities paradigm. *Environment and Planning D: Society & Space* 38(2): 207-226.